

テニパーク・みんなでわくわくソロキャンプ — 体験を通して防災意識を高めよう —



実践研究報告書



独立行政法人 国立青少年教育振興機構

国立岩手山青少年交流の家

※本データはHP掲載用です。ただし、グラフ等、不鮮明な部分がありますのでご了承ください。
詳細について御質問等がある場合は、当交流の家までお問い合わせください。



防災意識の高まり!

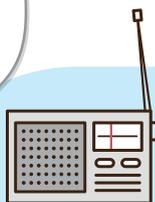
家庭・地域での
実践の共有、振り返り、更なる学び



みんなでソロキャンプⅡ

防災行動の発表・共有、キャップハンディ体験・避難誘導体験…

日常生活の中で
キャンプでの学びを
生かす



家庭や地域での防災行動

避難場所の確認、防災グッズの準備、日頃の挨拶・お手伝い…

体験を通して
自助・共助について
実感する



みんなでソロキャンプⅠ

防災炊飯、ソロテント泊、コミュニケーションワークショップ…

自助・共助の
視点

多様性・
他者理解の視点

●実践研究のあゆみ(令和3年度～)

令和3年度から防災・減災教育事業として取り組み、企画評価委員会を立ち上げ、毎年ブラッシュアップを図りながら現在のキャンプができました。1泊2日のキャンプⅠ、その後、家庭や地域で行動する期間を経て、キャンプⅡ(日帰り)を行うことがポイントです。

令和3年度から5年度までは「防災キャンプ」という名称で実施してきましたが、令和6年度は普及を見据え、より多くの子供たちに体験してほしいという思いから、「テンパーク・みんなでわくわくソロキャンプ～体験を通して防災意識を高めよう～」という名称に変更し、参加者への間口を広げました。

令和3年度



- 事業「防災キャンプⅠ・Ⅱ」のスタート
- 評価方法の試行
- ふじのキッズシアター芸術監督柳田先生によるコミュニケーションワークショップ(～R4)



令和4年度



- 古館ヤンチャークラブの参加(～R5)
- ボランティア事前研修会の実施(～R6)
- 評価方法の検討
- 中間報告書の作成



令和5年度



- ソロテントの購入
- 質問紙項目を小学生用に一部修正
- 耐熱ポリ袋を使った防災炊飯の試行
- タープ設営の実施
- コミュニケーションワークショップ研修(オンライン)



R3～5の事業チラシはこちら

令和6年度



- キャンプ名を変更「テンパーク・みんなでわくわくソロキャンプ～体験を通して防災意識を高めよう～」
- 県立青少年教育施設からの視察受け入れ
- 北海道アウトドアフォーラム(HOF)での成果発表
- 実践研究報告書の作成
- 研究成果の普及、活動プログラムの提供(次年度以降も継続)

普及への取組①



岩手県立陸中海岸青少年の家の親子防災キャンプのプログラムに防災炊飯が行われました。

普及への取組②



北海道アウトドアフォーラム2024にて防災炊飯の実演、試食会を実施しました。

「自助・共助の見える化」

国立岩手山青少年交流の家 所長 藤井 玄

私は子どもの頃、キャンプがとても好きでした。今でも思い出すのは、皆で一緒にテントを張ったこと、一緒に料理をしたこと、テントの中で友達と遅くまで話をしたこと。一方、夜中、一人でトイレに行きたくない、(雨の音を聞き)雨が落ちてこないか不安だった思い出もあります。そこには、皆と共同作業をしながら一緒に生活した楽しい思い出と、自然の中で誰も守ってくれない(孤独に感じる)不安が入り混じっていました。

初めに、本事業の企画を聞いた時、小学生3・4年の子ども達はソロキャンプができるのだろうか。また、ソロキャンプを通して子ども達に防災意識を高めることが果たして可能なのか、とても不思議でした。しかし、企画を協議していくと、ソロキャンプと自助・共助の関連が多かれ少なかれ分かってきました。ソロキャンプの孤独さ、共同での作業は、災害における避難生活との親和性を今では感じます。

実際、ソロキャンプ(キャンプI)後の地域での防災行動について発表するキャンプIIでは、子ども達から以下の発表を聞きました。

●家の防災バッグにある食料の賞味期限を確認し、賞味期限切れを見つけ買い直しました

●災害時に、(行政が示した)避難場所に行くためには一人で橋を渡る必要があるから、

橋を渡らなくても良い高所に家族全員が落ちあう指定場所を決めました など

本報告書に記載してありますが、子ども達の防災行動は多様なものがありました(詳しくはP7参照)。このことは、ソロキャンプは防災に必要な自助・共助の考えを学ぶ体験になり得ることを示していると思います。特に、今回素晴らしいと思ったのが、子ども達一人ひとりに持たせた「できるカード」・「ヘルプカード」です。自身ができる活動には「できるカード」を示します。助けがほしい活動には「ヘルプカード」を示し、友達やボランティアの協力を得ます。このカードは、自助、共助を見える化した点で大きな効果があったと考えています。ある状況下では、自身が困っていることを言えない人や表情に出にくい人がいます。また、手助けしたい人もいます。この両者を結びつけたのが、このカードでした。

ぜひ、このカードの有効性を学校や自身が企画する事業で使用して確かめてみてください。普通のキャンプが防災意識を育むキャンプに変わります。

最後に、事業実施に当たりこれまで4年間、様々なアドバイスをいただいた企画評価委員の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



●実践研究の概要

研究テーマ

「自助」「共助」の気持ちを育む防災教育の充実

背景

2011年に発生した東日本大震災の教訓を受けて、学校教育・社会教育ともに防災教育の重要性が指摘され、様々な実践が行われている。実践の蓄積に伴い、特に東北地方では防災に関する知識や技術、態度を育む環境は整ってきている。しかしながら、基本的な防災の取組を行わないために被害にあったり、優れた知識や技術を持ちながらも、地域社会とのつながりに欠けるためにその能力を発揮できなかったりする事例が散見される。このような状況を踏まえ、自らの命を守ることや、地域社会の中で能力を発揮できるための基盤となる、防災に対する基本的な態度の育成をさらに進めていく必要がある。

ねらい

体験学習型の防災キャンプを実施し、自然体験活動の中で自らの衣食住を営んだり、他者と関わったりすることを通して、自らのできることは自分で実行し、難しいことは互いに補いあうことの重要性に気づくことで、防災の基本となる「自分の命は自分で守る」「お互いに助け合う」という「自助」「共助」の意識を育む。

令和6年度の事業概要

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
キャンプⅠ	1日目			受付	開会行事	【活動①】 アイスブレイク	昼食	説明	【活動②】 テント・タープ設営		【活動③】 防災炊飯 (耐熱ポリ袋を使った炊飯)		【活動④】 振り返り	就寝準備	就寝
	2日目	【活動⑤】 野外炊事	【活動⑥】 テント・タープ撤収	【活動⑦】 PA (コミュニケーションワークショップ)		昼食	【活動⑧】 行動計画作成	閉会式							
家庭や地域で防災行動計画を実行する期間															
キャンプⅡ	日帰り		受付	発表練習	【活動⑨】 活動報告会	【活動⑩】 屋内 防災炊飯	【活動⑪】 キャップハンディ体験 避難誘導体験	【活動⑫】 振り返り	閉会行事						

POINT

キャンプⅠでの学びをもとに、家庭や地域で防災行動を実践し、キャンプⅡで発表・共有するという日程にしています。

キャンプⅠ

ソロテント・タープ設営・撤収

一人一張、自分が寝るソロテントを自分で設営しました(台風接近のため体育館に設営)。マットの準備から組み立てまで、自分でやろうとする姿が見られました。ボランティアが泊まる大型テントの組み立てや班のテーブル設置など、協力して作業する方が多い場面は、自然と協力し合う姿が見られました。R5年度は、屋外でのタープ設営も行い、協力して作業をしました。



R5タープ設営(屋外)



- ・テントを立てる時、手伝えたり自分でテントを張れた。
- ・テントを立てる時、分かんなくて友達に助けられました。

POINT

自分でできることは自分でする(自助)、困った時は仲間と助け合う(共助)場面を作るために、ボランティアはなるべく手出しせず見守りました。事前研修会及び打合せを念入りに行い、事業の趣旨を理解した上で支援に当たりました。

野外炊事① (防災炊飯・カレーライス)

丸カマドで火をおこし、一人一つの飯ごうで調理しました。耐熱ポリ袋を使ったご飯を炊き、レトルトカレーを温めました。使用する皿も新聞紙を折って作り、ラップをかけて使いました。



- ・木が燃えない時に綿みたいのものを作って工夫して使いました。
- ・火をつける時、新聞や牛乳パックから火をつけることを知りました。友達と火をどうやったら燃えるかを工夫しました。

POINT

野外炊事は通常であればグループで行いますが、この「防災炊飯」では、自助のために、火おこしや計量、盛り付けなどを個人で行えるようにしました。一方で、1人では難しいと感じる場面では、自然に共助が生まれる活動になっています。

野外炊事②（朝食焼きそば）



キャンプⅠの2日目は、共助意識の育成をねらい、朝食づくりは班での共同作業を設定したため、班で一つの鉄板を使い、みんなで焼きそばを作りました。



・キャベツの芯を取るのに苦戦していた時に友達を取り方を教えてくれてうれしかったです。

POINT

お助けアイテム「ヘルプカード」「できるカード」を児童に配付し、野外炊事やテント設営時に使用しました。このカードは、自助、共助の行動を「見える化」します。自分が困った時には助けを求め、友達が困った時には助けに動く姿が見られました。

聴覚障害がある方々にも有用でユニバーサルデザインの視点を踏まえた避難所運営にもつながります。

表



裏

HELP（ヘルプ）カード

このカードは、困ったときや、助けてほしいときに周りにの人にわたして助けを求めることができるカードです。勇気を出して助けてもらいましょう。

できるカード

このカードには、自分ができると、手伝えることを書いておきましょう。周りに困っている人、助けが必要な人がいたら、力になってあげましょう。

アイスブレイク、アドベンチャープログラム（コミュニケーションワークショップ）

共助意識の育成に重要である「コミュニケーション」の意識づけをねらって実施しました。仲間と協力して課題を解決する活動を通して、自分の意見を伝えたり、相手のことを考えて行動したりする姿が見られました。



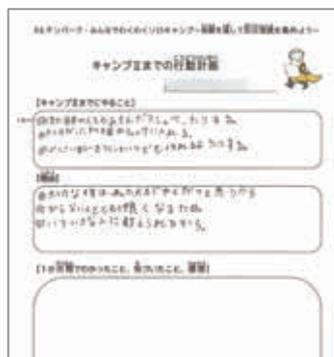
・みんなで呼吸を合わせてできたのでうれしかった。
・活動していくうちにどんどん楽しくなってきた、協力することも、大事だと思いました。

POINT

防災活動の基盤として「人間関係づくり」が大切です。自分の気持ちを伝える、相手に耳を傾けるなど、コミュニケーションの基本スキル向上のために、コミュニケーションワークショップの手法を取り入れました。

キャンプⅠで行動計画作成

自助・共助について改めて確認し、キャンプⅡまでの約1か月間で取り組むことを考えました。防災リュックの準備や災害時の食事づくりなど、直接防災に関わる行動のほか、「料理のお手伝いをする」「他学年の友達ともしゃべったりする」などの行動をあげた児童もいました。このような意識も、いざという時の防災行動につながるものです。



POINT

閉会行事において、迎えに来た保護者にキャンプのねらいや行動計画について伝え、子どもたちの取組への協力を依頼しました。

3週間の家庭での実行期間

参加者がそれぞれ家庭や地域で行動計画を実行しました。



POINT

キャンプⅡの前に、各家庭にメールで行動計画の実施状況を聞き、子どもたちの成長や変化について記入してもらいました。

キャンプⅡ

行動計画発表会

3週間の間に実行したこととその感想を発表シートにまとめ、発表し合いました。うまく書けない児童に対しては、ボランティアが子ども一人ひとりの取組を聞き出しながら、まとめの支援をしました。お互いの活動を共有することができ、友達の行動を参考にして次の行動計画を立てることができました。



POINT

リラックスした雰囲気での自分の思ったことが話せるように、発表は班内で行い、全体発表は希望者のみとしました。

屋内炊事 (防災炊飯・レトルトカレー)

屋内でカセットコンロと鍋を使って行いました。防災炊飯は2回目とあって、作業の手順を覚えている児童も多く、準備を手伝うなど積極的に行動する姿が見られました。



・皿を作るのに苦戦していたら、友達が教えてくれて、うれしかったです。



防災炊飯

POINT

災害時に水場のないホール等を想定した活動ができるよう、防災炊飯を屋内でできるようにしました。

キャップハンディ体験・避難誘導體験

多様性への理解を深めるために、キャップハンディ体験・避難誘導體験を行いました。「白杖」「車いす」「高齢者・妊婦」の3つのコーナーを設け、子どもたち自身がその不自由さを体験したあと、体が不自由な人役のボランティアを避難誘導し、どのように誘導したら安心してもらえるのかを場面ごとに考えることができました。



・目の不自由な人や車いすの人、腰の悪い人、妊婦さんの体験をしてみて、どの人も予想以上に不自由だと分かった。
・目が見えない人を誘導する時、「階段だよ」と声をかけたりすることができたので、良かった。

POINT

1回目の誘導の後、班で振り返りを行い、誘導される側の気持ちを知った後、2回目の誘導を行いました。

振り返り

過去に岩手県に台風が上陸したニュース映像を見て、具体的な災害の状況を想定した行動を考えました。「体が不自由な人は、できるだけ、今日学んだように手を貸してあげたいです」「もしも本当に台風が来るのなら、まずそのニュースを見て、親に伝えて、必要なものを集めてなるべく早めに避難する」など、事前にキャップハンディ体験や避難誘導體験を通して学んだことが、計画に反映されていました。



●調査結果

1. 質的評価

(1) 児童の感想、行動計画の大まかな傾向 (AIテキストマイニング)

〈分析・考察〉

①防災の基本的な態度の意識化

キャンプのまとめ・感想では、その日の活動内容に関する語句のほか、「自助・共助」「手伝う」「片付ける」「できる」という語句が多く表出しています。(図1、2)

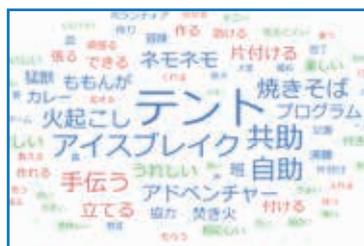


図1 キャンプIのまとめ・感想

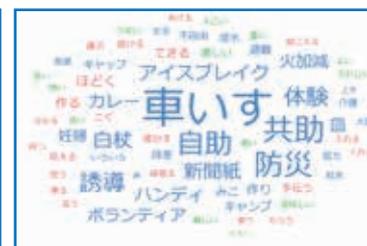


図2 キャンプIIのまとめ・感想

②家庭・地域で実践しようとする意識の高まり

児童が作成した行動計画では、「避難場所の確認」や「防災グッズの準備」、「手伝い」などの語句が表出しています。(図3、4)

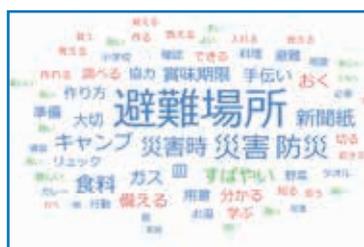


図3 行動計画I (キャンプI)



図4 行動計画II (キャンプII)

行動計画については、R3～5のキャンプではR6よりも「挨拶」など日頃の行動を意識した計画が多く見られていました。

(2) 児童の行動計画と実施した感想、保護者のコメント (参加児童4名を抽出)

●児童 (I.M)

【行動計画 I】 他の学年の人とも遊んだりしゃべったりする。大切だったものを家のリュックに入れる。防災カレーを作って、いつでも作れるようにする。

【感想】 大切なことを知って調べたり準備したりすると役立った。食料がたくさん必要だと知った。友達が多いと慣れた人と協力することができる。

●保護者

防災リュックの中身を再確認し、必要なものと不要なものを自分で判断しました。

●児童 (T.A)

【行動計画 I】 災害があった時のための準備 (水・食料)。災害時の「食事作り」で学んだことを家の人に教えてレトルトカレーを作ってみる。

【感想】 キャンプ道具やカセットコンロを使ってご飯を作ることができた。キャンプ道具はキャンプ以外にも災害時にも使えることが分かった。

●保護者

他の兄弟に新聞で作る紙皿の作り方を教えるなど、キャンプを振り返って話したり実践したりしました。家にストックする非常食を見直したり、それぞれの部屋に置く防災セットを準備したりしました。

●児童 (S.A)

【行動計画 II】 障がいがある人を見たら、助けられるようにしたい。非常グッズを用意していたけど、もっと用意したい。すぐに逃げることができるように、避難場所を決めておく。

●保護者

お手伝いをする回数が増えました。できることも自分でやってみることが多くなったと思います。災害時の避難場所の共有や防災グッズをそろえたりしました。

●児童 (K.A)

【行動計画 II】 台風が来た時にどこにいるか分からないので近くの避難所を確認したい。非常グッズを用意したい。

●保護者

新聞紙お皿の作り方を家族に教えてくれました。お手伝いを自分からするようになりました。水、食料等の備蓄品を見直し災害時の避難場所を家族で確認しました。

〈分析・考察〉

個々の児童の行動計画の内容から、自助・共助の意識、多様性や他者理解の意識の高まりが読み取れます。

保護者の8割がキャンプ後の家庭での変化を感じており、具体的な防災行動や成長を見取っています。(図5、6)

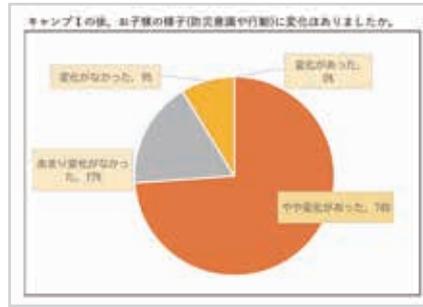


図5

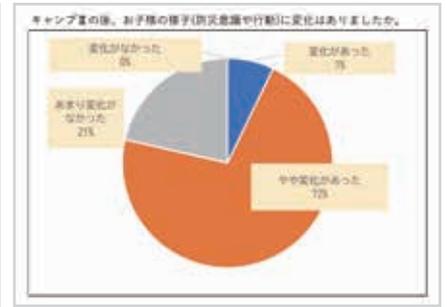


図6

(3) 班付きボランティアのレポート (12名のレポートから一部抜粋)

- たくさん手助けをしなければと思っていたが、子どもたちはほとんど自分たちだけでやっていて逆に自分が助けてもらった場面もあった。
- テント作りでは「ヘルプカード」や「できるカード」があったおかげで、人見知りや話をしてくれない子や助けが必要だけど恥ずかしくてお願いできない子が「ヘルプ!」「できるから手伝ってくる!」などの声各班の中で出ていたことが良かった。
- 2日目のテントを片付ける作業をしているとき、1日目は自分の作業が終わったら友達の作業も手伝うということは見られなかったが、2日目はそういった助け合いの姿も見ることができた。

〈分析・考察〉

身近で接したボランティアは、個々の頑張りやその成長をよく見えています。児童の自助・共助意識の高まりや行動の変容が具体的な行動としてレポートに書かれており、貴重な評価資料となりました。



2. 量的評価

(1) 児童の自助・共助意識の測定*1

〈分析・考察〉

キャンプI前 (pre)、キャンプI後 (post1)、キャンプII後 (post2) の3時点で、児童への質問紙調査を行いました。自助・共助得点の平均値は上昇が見られましたが(図7)、統計的な有意差は認められませんでした(測定は、HAD*2を使用し、分散分析を実施)。この背景には、キャンプI前 (pre) の得点が高かったこと、母数が少ないことが影響していることも考えられることから、結果の解釈には配慮を要すると考えられます。ただ、個々の得点の伸びを見ると、事業を通して多くの児童が得点の上昇が見られます(図8、9)。R4、5の調査でも同様の結果が得られています。

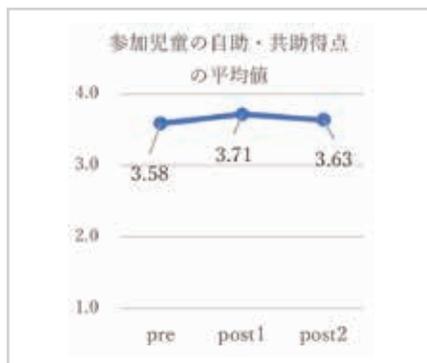


図7

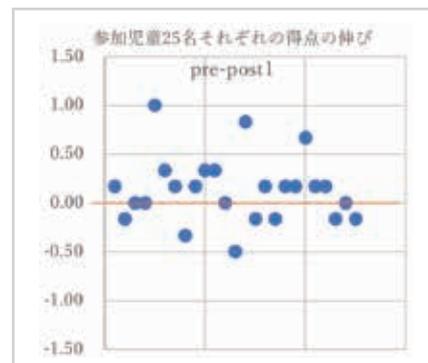


図8

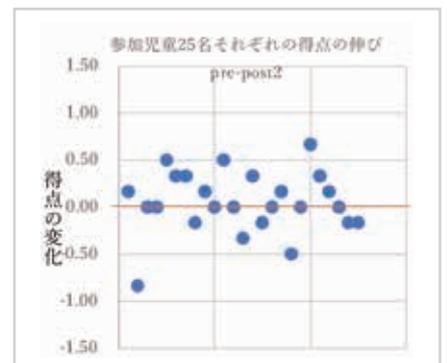


図9

*1 子ども用防災意識尺度 (秦・酒井・一瀬・石田、2015) を活用

*2 清水裕士(2016)、フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案、メディア・情報・コミュニケーション研究、1、59-73。

(2) 児童の防災行動に関する測定*3

〈分析・考察〉

家庭・地域での行動期間をはさんで、キャンプI前 (pre) とキャンプII後 (post2) の2時点でHADを使用したt検定を行いました。平均値に統計的な有意差はなく、R4、R5の調査でも同様の結果でした (R4は第1因子3.86→4.07、第2因子4.22→4.59、R5は第1因子3.50→3.79、第2因子4.15→4.09、いずれも統計的な有意差なし)。

得点が下がった児童もいましたが、個々の行動計画やまとめの記述を見ると、それぞれが家庭や地域で防災行動を起こしていました。

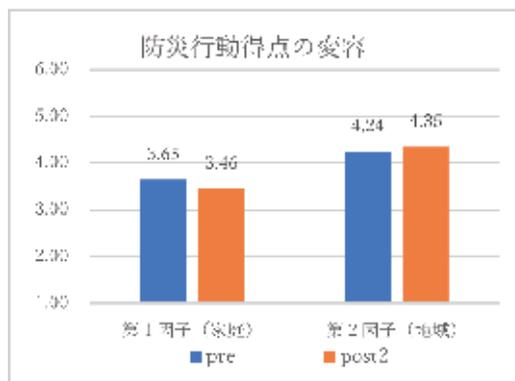


図10

(3) 保護者の防災リテラシー*4と児童の自助・共助意識との関係

〈分析・考察〉

図11から、保護者の防災リテラシーと、自助共助得点についてHADを使用した相関分析を行った結果、弱い正の相関関係 (保護者の防災リテラシーが高いほど子供の自助共助意識が高い) が見られました (相関係数 $r=0.31$)。R4、R5の調査でも同じ傾向でした。自助・共助意識の向上には保護者の関わりが影響し、キャンプ事業と日常生活を組み合わせることで教育効果が高まることが期待されます。

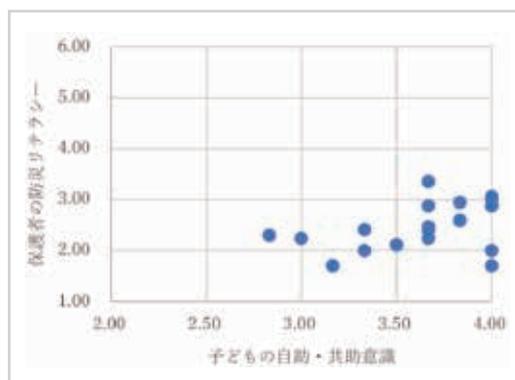


図11

【参考文献】

- 秦康範・酒井厚・一瀬英史・石田浩一 (2015)．児童生徒に対する実践的防災訓練の効果測定-緊急地震速報を活用した抜き打ち型訓練による検討. 地域安全学会論文集、26、45-52.
- 古山暢尋・富永良喜 (2020)．中学生を対象とした防災行動評価尺度の 開発及び妥当性・信頼性の検討-「備える防災」に焦点を当てて. 防災教育学研究、1 (1)、43-51.
- 松川杏寧・兪瑋・佐藤史弥・永松伸吾・立木茂雄 (2021)．構成概念妥当化パラダイムを用いた防災リテラシー尺度の開発. 地域安全学会論文集、39、375-382.



青少年教育研究センターからのコメント

事業の成果を数値で把握することは非常に重要です。統計的解析を通じて、感覚や主観に頼らずに客観的に評価することができるからです。しかし、数値だけでは見えてこない大切な情報も存在します。本報告では、参加者、保護者の皆さん、そして事業期間中に子どもたちを一番近くで見守ってきたボランティアの声を結果として編纂しています。これらは、3つの異なる視点からの評価であり、参加者個々人の事業による変容を確認するのに有用です。

質問紙調査による量的評価で有意性が見られなかった項目も、個人の変化を児童が作成した行動計画や感想、保護者やボランティアのコメントから拾った質的評価として捉えることができます。数値データと質的データを併用することで、包括的で均衡の取れた事業評価が行われたと思います。

青少年教育研究センター副センター長 樋口 拓

*3 中学生を対象とした防災行動評価尺度 (古山・富永、2020) を小学生用に一部修正して活用

*4 防災リテラシー尺度 (松川・兪他、2021) を活用



質問紙

防災に関するアンケート (pre)

これは、防災キャンプに参加したみなさんの、防災に関するアンケートです。
 皆さんが書いてくれた感想は、担任の先生に宛たりたり、他の友達に宛たりたりすることはあり
 ません。アンケートに書えたくない場合は、書えなくても大丈夫です。途中で書えなくなってもかま
 いません。安心してアンケートにご協力ください。

学号	名前	
----	----	--

【問1】
 あなたの、防災に対する意識についてお聞きします。下の質問について、あなたに合っていると感
 じやすい番号を、1～4の中から一つ選んで、○を付けてください。（あまり深く考えず、思った通り
 に、正直に書いてください。）

	あ ま り は ま ら な い	あ ま り は ま ら な い	あ ま り は ま ら な い	あ ま り は ま ら な い
1 災害が起きた後、役立つことを選んでやりたい。	1	2	3	4
2 災害やひなんについて学んだことは、家の人に教えてあげたい。	1	2	3	4
3 災害が起きると、みんなで支え合うようになると思う。	1	2	3	4
4 災害やひなんのことを学べば、自分がかも安全になると思う。	1	2	3	4
5 電気・ガス・水道が止まっても、くふうや協力で何とかできる。	1	2	3	4
6 防災訓練は大切だと思う。	1	2	3	4

※アンケートは、匿名に扱います。

【問2】
 あなたの、防災に関する行動についてお聞きします。下の質問について、あなたに合っていると感
 じやすい番号を1～4の中から一つ選んで、○を付けてください。

	し ま じ ま ら な い	し ま じ ま ら な い	し ま じ ま ら な い	し ま じ ま ら な い	し ま じ ま ら な い	し ま じ ま ら な い
1 青の強い家具（タンスなど）や家電（テレビや洗濯機）が倒れないように、家の入と取り組んでいる。	1	2	3	4	5	6
2 家の人が数日間過ごせる量の食料や水などを、家の入と用意している。	1	2	3	4	5	6
3 外にひなんをするときに持ち出す自分のリュックなどを準備している。	1	2	3	4	5	6
4 いざという時にどうやって家の入と連絡を取り合うか、話し合っている。	1	2	3	4	5	6
5 船や強い風など、家の入と前々のとき、災害の危険がある場所については、お互いにひなんするかを話し合っている。	1	2	3	4	5	6
6 テレビや新聞などで、気象情報や災害に関する情報を日ごろから見ている。	1	2	3	4	5	6
7 ひなんの備にお手伝いが必要な人のことについて家族で話し合っている。	1	2	3	4	5	6
8 地域の様々な防災学習プログラム（けむり体験、地震の揺れの体験など）に参加してきた。	1	2	3	4	5	6
9 地域の様々な防災学習イベント（ひなん訓練、ひなん所説演習）に参加してきた。	1	2	3	4	5	6
10 地域の入に普段からおいでつをしている。	1	2	3	4	5	6
11 地域の行事（お祭り、資源回収、清掃活動など）に参加してきた。	1	2	3	4	5	6
12 自分の家族以外の人に對しても、手伝いやボランティア活動など、入に役立つことをしている。	1	2	3	4	5	6

R6デンパーク・みんなであわくソロキャンプ体験を通して防災意識を高めよう～保護者アンケート～

お名前（ ）
 1～4の番号に○をつけてください。

	あ ま り は ま ら な い	あ ま り は ま ら な い	あ ま り は ま ら な い	あ ま り は ま ら な い
1 地震が起こると、多くの建物が倒れる恐れのある地区がどこか知っている	1	2	3	4
2 被災したとき、行政からどんな支援が受けられるか知っている	1	2	3	4
3 私の住んでいる市町には、どのような防災の計画があるか知っている	1	2	3	4
4 ハザードマップをもとに、災害時にどこが危険な場所か書ける	1	2	3	4
5 わたしの地域で過去にどのような災害が起こったか知っている	1	2	3	4
6 地震・津波や洪水について十分な知識を持っている	1	2	3	4
7 自宅の耐震性能がどの程度か知っている	1	2	3	4
8 災害時、避難するかもしれない計画が適切にできる	1	2	3	4
9 災害時、周りが避難していても、自分の判断で避難するかもしれない決断ができる	1	2	3	4
10 地震が起こったとき、命を守る行動を、とっさにとれる	1	2	3	4
11 災害が発生したとき、スムーズに避難できる	1	2	3	4
12 災害時には、まずは、自分の身の安全は自分で守るべきだと思う	1	2	3	4
13 非常用持ち出し袋を準備している	1	2	3	4
14 普段から、飲料水や非常食などを備蓄している	1	2	3	4
15 地震・津波や洪水のときにどうするか家族や身近な人と話し合っている	1	2	3	4
16 災害が起こったときの連絡手段を、家族や知人と確認している	1	2	3	4
17 災害時に備えて、自分の生活機能のために必要なもの（電動車椅子のバッテリー、薬、食料、その他生活に必要なものなど）を事前に準備している	1	2	3	4

ご協力ありがとうございました

●まとめ

1. プログラムについて

- 参加者の自助・共助意識の高まりが確認できたことから、ねらいは達成できたと考えられる。キャンプで自助・共助や多様性、他者理解の視点を与え、家庭や地域での防災行動計画の実行とその振り返りを行うことが、日常の防災意識を高めることに効果的だったと考えられる。
- ソロテント泊や野外炊事、キャップハンディ・避難誘導体験などの個々のプログラムでも、視点を与えたことで参加者の意識の高まりが見られた。
- 職員やボランティアの事前研修に、念入りに時間をかけ、活動のねらいや進め方を共有したことで子どもたちの成長を感じられた。保護者に対しても、丁寧に活動の趣旨を説明し、子どもたちの計画実行に協力してもらえ体制を作ったことで、教育効果が高まったと考えられる。

2. 評価方法について

- 本実践研究では、キャンプ後の日常生活における行動の在り方で評価することができた。参加者の行動計画やその感想、ボランティアや保護者の見取り等、複数の質的評価を組み合わせることにより、個々の行動変容を見取ることができた。
- 「自助・共助得点」「防災行動得点」等の量的評価については、今回は集団としてのデータでは有意差を確認できなかったが、個々のデータの変容に着目し、質的評価と組み合わせ分析したことで、事業評価に生かすことができた。

社会教育における本事業の意義について

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 総括課長 小澤 則幸

青少年教育施設において防災・減災教育に取り組むことは、参加者の防災意識を高めることはもちろん、参加者が住む地域全体の防災・減災意識の向上や、災害時において迅速かつ効果的に対応する力を高めることができ、社会教育を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくりに大いに寄与するものであります。

本事業は、国立岩手山青少年交流の家においてモデル事業を展開することで、周辺の県立及び市町村立青少年教育施設等において防災・減災教育事業が活用されることを目指すゴールとしておりました。その中で、小学校中学年の児童を対象として「自助意識」「共助意識」を高めることに主眼をおきながら、公募型の多様な集団での活動を活かし、事業内容及び評価方法を工夫することによる教育的効果を期待して取り組まれました。具体的にはキャンプの中で、災害時に活用することのできる具体的な行動を学びました。キャンプⅠでは、大型テントの組立てや班のテーブル設置など、協力が必要な場面が設定され、キャンプⅡでは、キャップハンディ体験や避難誘導体験といった、様々な場面を想定した体験活動が設定されています。災害時には、周囲の人々と協力し合うことが非常に重要であり、そのための準備が日常から行われることが求められます。キャンプⅠを終え、キャンプⅡまでの3週間における家庭での話し合いや行動が、参加者の学びを深化させるとともに、行動計画を保護者に説明し、家族で共有したことも共助意識の高まりにつながったものと思われまます。

令和3年度から4年間にわたり本事業を推進されました国立岩手山青少年交流の家職員の皆様及び協力いただいた関係者の方々に深く感謝いたしますとともに、今後、県内の青少年教育施設等において本事業の成果を取入れた事業が展開されることを期待申し上げます。



本事業の成果と実施上のポイント

東京都立大学 教授 野元 弘幸

本事業に取り組んだこの4年間でも秋田豪雨や能登半島地震など全国で多くの災害が発生し、甚大な人的・物的被害が生じた。加えて、南海トラフ地震の30年以内の発生率も70~80%から80%に引き上げられ、いよいよ大災害への備えがすべての国民の喫緊の課題となりつつある。本事業はそうした課題に向き合い、国及び地方自治体が設置する青少年宿泊型野外活動施設でどのような防災教育プログラムを展開できるかを模索したもので、「防災キャンプ」に焦点を絞ってプログラム開発を試みたものである。

子どもを対象とする宿泊を伴う防災教育プログラムは学校や公民館などで多様に展開されているが、これらのプログラムの多くはこれまでに蓄積された経験知をベースとするもので、プログラム内容の構造化や評価の活用という点では未開発の部分が多かった。そこで本事業では、防災の基本である自助・共助意識を高め、行動する力をどう育てるかに加えて、地域(Community)、コミュニケーション(Communication)、多様性(Diversity)を軸にプログラムを組み立てて試行した。また、評価についても、量的、質的な多様な評価方法を活用しながらプログラム全体の効果を測った。

結果は、本報告書に明らかなように、参加した児童が防災意識を高め、早速、家庭や地域で防災にかかわる行動を起こす姿を見ることができた。対象児童が小学3・4年生ということで、当初は「学年が低すぎないか」という心配の声もあったが、すぐに杞憂であることが確認された。参加児童はキャンプIとIIの間の行動計画に基づく取り組みにも、家族や地域を巻き込んで、意欲的に取り組んでいた。

事業のポイントとして挙げたいのは以下の2点である。一つは、プログラムの質と安全を担保する上で、ボランティア・スタッフの養成や研修が重要という点である。炊事やテント設営の過程で子どもを見守ることと、防災意識を高めるための声かけは準備なしには難しい。もう一つは、保護者の協力や評価への参加をどのようにプログラムに組み込んでいくかである。子どもたちは想像以上に家庭や地域を巻き込みつつ、自らが作成した防災行動計画の実施に真剣に取り組んでいた。



【令和6年度事業企画及び報告書作成】

● 国立岩手山青少年交流の家

藤井 玄 (所長)

中村 聡 (次長)

田口 直彦 (企画指導専門職)

根本 清一 (企画指導専門職)

鈴木 巴菜 (事業推進係)

【協力者・連携機関】

青少年教育研究センター

古館ヤンチャークラブ

柳田ありす (ふじのキッズシアター芸術監督)

【企画・評価に関する指導・助言】

● 令和6年度企画評価委員 (五十音順)

石幡 信 (NPO法人古館まちづくりの会 理事長)

小澤 則幸 (岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 総括課長)

片野 正喜 (岩手県立県北青少年の家 所長)

小松山 浩樹 (盛岡市立浜民中学校 校長)

田端 政人 (岩手県復興防災部防災課 総括課長)

野元 弘幸 (東京都立大学人文社会学部 教授)

山本 和広 (滝沢市市民環境部防災防犯課 課長)

【印刷】永代印刷

【発行】国立岩手山青少年交流の家

令和7年3月作成



独立行政法人 国立青少年教育振興機構

国立岩手山青少年交流の家

〒020-0601 岩手県滝沢市後292

TEL : 019-688-4221

FAX : 019-688-5047

URL : <https://iwate.niye.go.jp/>



体験活動の魅力を発信!

【国立岩手山青少年交流の家】で検索!



Instagram



YouTube